

モンテーニュの思索の歩み

——『エッセー』の構造とその論理に見る——（その十二）

竹 田 英 尚

Montaigne, sa Vie et sa Pensée, dans le Développement de la Structure et de la Logique des Essais (12)

Hidenao TAKEDA

第二章 個性の開花

（５）「エッセー」の意味及び『エッセー』の個性

書名を表わす「試し」という語「エッセー」(《essai》)は、執筆第一期においては「判断の試し」の意味であった。試しに判断を働かしてみること、現在の判断力を試験してみること、判断力を磨く練習をすること、このような「判断の試し」が、モンテーニュが「エッセー」の語に代表させる『エッセー』という作品の性格であった。ところが執筆第二期では「試し」の対象が微妙に変化する。それは「生来の能力」(《facultez naturelles》)の「試し」に広がる。もちろん「生来の能力の試し」は判断力を排除するわけではない。それどころか「生来の能力」のうちモンテーニュが最も重視して練磨を心がけるものは依然として判断力である。執筆第二期でもモンテーニュが相変わらず『エッセー』を「判断の試し」の書であると説明することもある。『エッセー』を書く彼の志向が変わったわけではないのである。「判断の試し」と言い、「生来の能力の試し」と言い、どちらも一貫した作者の態度を表わしている。しかし同時に一つの発展も暗示している。すなわちそこには『エッセー』の進化の一面がある。私達はただ変化のみに目を奪われて進化を捏造してはならない。一方に同一性を確認できる変化を捉えて進化を論じるべきであろう。まさに同一性と変化を表わす二つの語句は同じものの変貌の表現であり、『エッセー』の進化を考察する視座となる資格を備えている。今やモンテーニュが『エッセー』を書いて試すのは「判断力」だけではなく、彼の「生来の能力」(《facultez naturelles》)一般である。すなわち「試し」はモンテーニュという精神の「自然」(《nature》)全体にかかわる行為になる。それはまた、ただ判断や推理の能力にとどまらず、モンテーニュという人間の「自然」に到る道でもある。したがって執筆第二期における「判断の試し」から「生来の能力の試し」への発展は、『エッセー』の進化を象徴しているのである。しかもそれは進化の種々の様相をつつむ象徴である。本稿ではこの「生来の能力の試し」の意味を考察してゆこう。

まず「生来の能力の試し」である『エッセー』は永遠に未完成の宿命をもっている。ちょうどモンテーニュが生涯『エッセー』を補筆訂正し続けたように、『エッセー』は永遠に未完成の書である。何度か『エッセー』を出版したこともその完成のしるしではない。未完成の書として出版したところに『エッセー』の特色がある。その特色はモンテーニュの次のような感情から始まる。

私の中にある生れつきの能力はどうかと申しますと、この書物はそれの吟味なのですが、その重荷にあえいでいるのを感じます。私の理解も判断も、手探りでよろめきながら、つまづきながら、まごまごしながら、やっとのことで進んでおります。そして私ができる限り先に進んだと思ったときでも、私はちっとも満足しませんでした。その向うにまだ、国らしいものが見えるのです。けれども、私の視力はぼんやりとかすんでいるので、はっきりと見わけることができません。¹⁾

モンテーニュのこの困惑をたんなる謙遜の言葉に解すれば、彼の真摯な探究を軽視することになろう。むしろこの困惑は「生来の能力」で「試し」を行なっている証である。たとえ『エッセー』が歴史や哲学や文芸の知識に満ち満ちた外見をしていようと、モンテーニュは「生来の能力」で理解し、表現することによって『エッセー』を作ろうとしたのである。そこに思索が未知の薄明の世界を歩む渋滞感が生まれるのである。私達は自己の認識を「生来の能力」の獲得物でない既成の思想や知識に摩替える安易さを排するならば、「手探りで」、「まごまごしながら」進む動揺や焦燥に苦しまねばならない。先人の思想が認識の対象であっても変わりはない。あくまで「生来の能力」で理解しようとするなら、すなわち理解の本質的な意味通り、思想を自己の中に抱懷し、自己自身に一体化させながら理解しようとするならやはり同じ感情に襲われるであろう。「できる限り先に進んだと思ったときでも」少しも満足することができないのもまた不思議ではない。イデオロギーに服従して「試し」を放棄しない限り、真理の「国」にいつまでも「生来の能力」が見極められない「ぼんやりとかすんでいる部分」が残るのは当然である。しかしそれは「試し」の真正と能力の鋭敏さのしるしでもある。まだ精神の中により良き認識の種子が宿っているからである。

私はつねに心の中に、ある観念、あるぼんやりした概念をもっている。それは私に夢の中のように、私が実際に作ったものよりも立派な形を示すのだが、私はそれを把握し、利用することができない。²⁾

したがってモンテーニュの不満足感は、彼が見ている世界の豊饒と深遠の同義語である。現在の自分を越えて存在するものを直観する崇高な精神のしるしである。しかしながらモンテーニュは『エッセー』を書かねばならない。たとえ崇高な精神のしるしであろうと、強い不満足感は著作の筆を鈍らせるのではないだろうか。恐らく天才と言えども完璧無疵な作品を創造した確信には達しないに違いない。普通芸術家はもっとも完全に近づき得たと信じる断念によって完成とするのであろう。ともかくも芸術家は完全に向って努力する。ところが逆にモンテーニ

『エッセー』は完全を目指す彫琢を拒否することを『エッセー』の方法にするのである。未完成の自然さを「生来の能力の試し」という作品の眼目にする。彼は「各部分を生まれたままの姿で見てもらいたいのだ³⁾」。「最初の思想を第二の思想で訂正することはけっしてしない⁴⁾」ことが建て前である。『エッセー』は過去の理解や判断にこだわらず、ある日ある時の「生まれたまま」を記すが故に「試し」なのである。そこに『エッセー』という随想の時間の特徴がある。「生来の能力の試し」は過去に獲得した認識の吟味でもなければ、未来の認識体系のための実験でもない。対象に向った自分の中に芽を吹き、生長してゆく思想を「生まれたまま」表現しようとする時、精神の中で成熟して変容した過去は現在と一体になり、その過去と現在の蓄積が未来に変わる。「生来の能力の試し」は常に現在の意識を見つめ、現在の継起が『エッセー』を作る。『エッセー』は永遠に未完成な現在の堆積である。

不完全、未完成を標榜する『エッセー』はしかし私蔵の日記ではなく、出版作品である。画家の「試し」であるデッサンは目標の絵の影に消える。作家は種々の草稿を作品にすることはできない。常に「試し」は作品の完成とともに消え去る運命にある。ところが『エッセー』は「試し」でもあり作品でもある。そこから『エッセー』と読者の間に奇妙な関係が生じる。モンテーニュは自分の思想について、「私の信じていることとして示しているので、人の信ずべきこととして示しているではありません⁵⁾」ときっぱり読者を拒絶する。巻頭の「読者に」は、「あなたが、こんなつまらぬ、むなしい主題のためにあなたの時間を費やすのは道理に合わぬことだ」という眩惑的な序詞である。『エッセー』は「生来の能力の試し」なのであるから、他人に責任を負えない作品であると言う。

私は他人に対して、自分の言説に責任をもつことは、とてもできそうもない。私自身に⁶⁾対してさえ、その責任がもてないし、自分でもそれに満足していないのだから。

モンテーニュは「生来の能力の試し」である『エッセー』の無責任性を強調する。ではそれは作者の責任を放棄することであろうか。いや逆にそれは『エッセー』の作者としての責任を遵守することである。本来「試し」とは無責任であらねばならない。もし過去や未来や他人との関係を考慮しつつ行なわねばならないならば、「試し」は巧利的な目的性や常識の緊縛から私達を解き放つ創造的な生命力を失うであろう。責任は「試し」から独創性を奪うのである。モンテーニュは逆説的な宣言によって「試し」の純粹性を擁護する。過去や未来や他人との関係を超越した、純粹な時間と空間の中に「試し」を守る。『エッセー』の無責任性は実は真摯な「試し」の裏返しなのである。モンテーニュが自らに課す責務は、自己の意識を見つめ、「生来の能力」の可能な限り自己の思索を発展させ、その過程と結果を忠実に粉飾なしに『エッセー』に書き写すことである。したがって彼の責任が以下のこと以外にないのもっともである。

だから私はいかなる確実さも保証しない。ただ私がいま考えていること、論じている事柄⁷⁾について私のもっている認識が現在どこまで進んだかを示すだけである。

ところで純粋に個人的な時間と空間を理想とする「試し」は、私達の経験のあるべき姿に似ていないだろうか。私達は過去に支配されず、未来を思い煩わず、社会的利害の中で右顧左眄することなく、「生来の能力」が語る声に耳を傾けて現在と直面する時、経験と思索が自己の創造となり、自己を実現する行為となるのではないだろうか。その時経験と思索は私達の深い内部から湧出する、私達自身の生の営みになるに違いない。しかしながらこのような純粋な時間と空間は恐らく稀有のことであろう。現実には「試し」のこの純粋性を妨げる障害が無数にある。しかしモンテーニュは、いかに立派な言葉で飾られていようと、それらは殆どすべて人間に自分自身の富と力を忘れさせ、空虚なものを追わせる虚名であると考えている。彼はできるだけ純粋な時間と空間に近づけることによって、「試し」を人間の深い自然の創造的な生気に触れさせようとするのである。私達はモンテーニュの人間観、社会観、自然観の中に同じ脈絡にある思想を見出すであろう。

「生来の能力」は一方では当然「後天的な能力」に対立する。「生来の能力の試し」はその純粋性を保とうとするならば「後天的な能力」を排除する必要がある。『エッセー』は学んだ知識を試す試験であってはならない。

私がここに書き綴ることは、私の生れつきの能力の試験であって、けっして後天的な能力の試験ではない。だから誰かに私の無知をつかまれても、私は何とも感じないであろう。私は他人に対して、自分の言説に責任をもつことは、とてもできそうもない。私自身に対してさえ、その責任がもてないし、自分でもそれに満足していないのだから。もし学問をお求めになるのだったら、学問の宿るところにいったってお探しなさるがよい。学問のことくらい私が大きな口をきけないものはない。ここにあるものは私のとりとめもない空想である。⁸⁾

「生来の能力の試し」は反学問、無知を標榜する。『エッセー』は諸般の書籍を渉猟した知識を誇る本であってはならない。ちなみに当時は博学な著作が流行していた。文芸や哲学思想に限らず、史実や古事逸話、風俗習慣など広く人事全般に渡る古今東西の知識を集めた、文集や教訓集や実例集が続々と編まれた。反学問の姿勢は、一つはこのような百科事典的な著作に対する批判である。さらに一つは、表現や思考の技術を教える学問を考えねばならない。モンテーニュは学問に反対して、弁証学が強制する整然と組み立てた論考、細部に過敏な文法家の瑣煩な語法、修辞学の技巧を凝らした文章を否定しているのである。それらが七自由科目の三学に相当することは言うまでもない。下線部に注意して次の引用を読めば、今指摘した関連を容易に察知できるのである。

私は賢くなることを求めるだけで、物識りになりたいとは思わないから、論理的な、アリストテレス的な配列には用がない。いっそのこといきなり本題に入ってほしい。私は死だの、快楽だのがどんなものかは十分にわかっている。そんなものの分析にひまどって

もらいたくはない。私は、いきなり、それらの圧力に堪えることを教える立派な、しっかりした理由を求めているのだ。それには文法上の精緻も、巧妙な言葉や議論の組合せも役に立たない⁹⁾。

モンテーニュは『エッセー』で扱う知識についても責任を回避し、そして「とりとめもない空想」の素朴さを守ることによって、「生来の能力の試し」をさらに純粋なものにする。こうして彼は『エッセー』を過去や未来の束縛からも、第三者に対する関係からも、学問という重荷からも解放し、二重三重に「生来の能力の試し」の自然な創造性を保つのである。

ところで、もっとも批判的な意味においては学問とは結局知識の代用語であり、知識の拾集と保持を果たす能力は記憶力である。反学問を唱える者は「生来の能力」でも記憶力だけは尊重してはならないことになろう。実際モンテーニュは度々自分の記憶力の貧困を吹聴する。

物事はいつか私に知られることがあるかも知れない。いや、かつて偶然に、物事の明らかにされる場所に連れて行かれたとき、私も物事を知っていた。しかし私の記憶力は、私が保管を託した貯えを三日保持する能力もない¹⁰⁾。

しかしながら、記憶力が貧弱であると感じる感情は、現実にはそのような人間であったかどうかと言うよりも、対象を見るモンテーニュの構えに由来している。たとえば、読んだ哲学書の内容が頭によく残るかどうかは、当人の記憶力だけが原因ではなく、思想を読む態度が大きく影響する。思想を知るために言葉を追って読む者は自然とその外貌を記憶することに意識が向う。しかし哲学者の物の見方や考え方に心を奪われ、思想を自己の内部に反射させ、自己を耕しながら読む者は、本の内容を言葉で思い出す困難が大きいと言えよう。どの哲学書にあったか、誰の思想であるかなどはたやすく忘れてしまうであろう。「生来の能力」で「試し」つつ読む者が、知識には注意が疎くなり、記憶があやふやになりがちなのは当然である。モンテーニュの記憶力の欠如の感情は、『エッセー』を書く姿勢とまったく符合している。記憶が頭に貼りつける知識ではなく、理解が内部に沈殿させるものを求める態度がその欠如感の原因なのである。

記憶は知識の容器であり、鞘である。その記憶がこんなに欠けているのだから、私がほとんど何も知らなくとも大して文句を言えた義理ではない。私は諸学芸の名前と、それらが何を扱うのかを大ざっぱには知っている。だがそれ以上は何も知らない。私は本をめくるが、それを研究はしない。そこから私に残るもの、それこそ私の判断が儲けた唯一のものであり、私の判断が摂取した思想なのである。その著者とか、箇所とか、その他の事柄は、すぐに忘れてしまう¹¹⁾。

モンテーニュは「諸学芸の名前」や「それらが何を扱うのか」とか「著者とか、箇所とか」の記憶に対して、「判断が摂取した思想」を対比する。「判断の試し」から「生来の能力の試し」へ発展した『エッセー』は何よりもそれを目的にしなければならない。その為には、記憶が保存

する外面的な知識はむしろ「すぐに忘れてしまう」ような態度が望ましいと言えよう。一方では該博な知識を収めている『エッセー』の著者であるモンテーニュが記憶力の貧困を嘆いているのは決して謙遜でも偽いでもない。彼が記憶が貧弱であると感じることに何ら自家撞着はない。生涯書きつづけた『エッセー』の根本である「生来の能力の試し」の性格とまったく一致した感情なのである。まったく同じ脈絡にある真実の言葉である。それは「試し」が知識の記憶に陥ることを恐れる彼の態度に由来している。記憶力の貧困を嘆く声は「生来の能力の試し」を墨守する自己確認でもあれば、その意義のパラドクサルな弁明でもある。

『エッセー』が反知識の書であるという宣言は、しかしながら、『エッセー』にあふれる知識に驚かされる私達には尚含点がいかにぬ所が残るであろう。『エッセー』は古典古代の哲学、文芸、歴史、風俗などの知識の宝庫の観がある。さらに著者の関心は古典古代に限らず、近代ヨーロッパはもとよりオリエント、アジア、新大陸など古今東西に渡っている。とくに執筆第一期の『エッセー』はこのような知識を拾い集めて綴っただけではないのか。それ以外に「判断の試し」とか「判断が摂取した思想」があったであろうか。反知識の宣言は執筆第一期の『エッセー』とまったく矛盾しているように思われる。執筆第一期から執筆第二期の間に『エッセー』を書くモンテーニュの姿勢が反転したのであるだろうか。確かに読書から拾った書誌的事例に埋まった執筆第一期の『エッセー』は、まったく知識の書のような外見を呈している。しかしながら肝心なのは知識の量よりも知識に対する態度である。モンテーニュがどのように書誌的事例を扱っているかを見なければならぬ。彼の「判断の試し」が書誌的事例の世界から始まったことは事実である。しかしそれは「実例」(《exemples》)こそ「私のような非力な人間が追うにふさわしい獲物」¹²⁾だったからである。そして『エッセー』を書き始めた頃のモンテーニュは、賢明な著者たちによって整理された「実例」である書誌的事例をまず活用することを考えたのである。本論の第一章で『エッセー』の構造を分析して繰り返し指摘したように、彼はただ汲汲と事例を集めたのではない。読書だけではまだ無秩序に散在している色々な事例を彼なりの判断で関連づけ、組み立てることによって、判断と認識の練習をするためであった。執筆第一期の『エッセー』では「判断が摂取した思想」はまだ知識の影に隠れてはいるが、このような判断と認識の努力が事例の構成を司っていたのである。それはまた次のような所から知ることでもある。モンテーニュはいつまでも書誌的事例に甘んじてはいない。すでに執筆第一期においても彼は書誌的事例を手本にしながら、彼自身の見聞する世界の中から自分自身で実例を発掘しているのである。このことはモンテーニュの関心が事例という知識を集めることに傾いてはいなかった証拠である。知識の内容を理解し、判断することに努めた結果事実を見る目が成長し、現実の中に判断の対象を探すことが可能になったのである。執筆第一期における「判断の試し」を晦ませている書誌的事例が『エッセー』に占める比重の推移は、まさに「判断の試し」の進化の指標である。執筆第二期においてもその進化は第一期から連続した発展を見せる。たとえば第一

卷第二十四章はローマの偉大さを示す事例を集めただけの章ではあるが、そこにも一つの変化が認められる。冒頭の文は、事例を集める一方でモンテーニュは目を現代に向けていることを教えている。もう彼は書誌的事例の世界と現実の世界を同じ地平に眺めて書いているのである。第二卷第九章はさらに進化した姿を見せている。事例を綴り合わせていることに変わりはないが、パルチア人の武器や武装法に関して集めた事例をフランスの例と一対に組み合わせて章を作っている。この構成は書誌的事例の世界と直接経験の世界が一体になったことを示していると言えよう。書誌的事例の影に隠れていたモンテーニュ自身の観察と判断が、成長して表に現われて来たのである。そして今や彼は自分自身の観察眼で経験的な事実を判断し、「生来の能力」だけで事例を発掘することができる。もはや「判断の試し」は必ずしも書誌的事例は必要ではない。執筆第二期の『エッセー』はモンテーニュが自分自身の経験から引き出した事例が遙かに多くなる。たとえば第一卷第二十六章や第二卷第八章のような長い章でも殆どすべてモンテーニュ自身の観察が捉えた事例である。これらの章では書誌的事例を取り除いても論の運びには何ら破綻はない。執筆第一期では書誌的事例を組み立てる裏にある臃な意識でしかなかった「判断が摂取した思想」が随想の展開を導くようになったからである。そして書誌的事例や経験例はその流れの中に吸収される。たとえば第二卷第十六章にその原初的な姿を見ることができよう。¹⁴⁾執筆第二期に到ってモンテーニュの思索はもはや書誌的事例のあとを追ってはいない。事例に依存した思索は事例を活用する思索に成長する。「判断の試し」は書誌的事例の影から抜け出て、「生来の能力」の試しという自らの歩みを始める。

今『エッセー』の「判断の試し」の材料である事例——すなわち書誌的事例と経験例——の変遷を粗描した所からも察知できる如く、いかに執筆第一期の『エッセー』が非個性的な外見であろうとも、やはりモンテーニュの「判断の試し」が著作の中心だったのである。その進化は執筆第一期の彼の関心が「判断の試し」であった一つの証明であろう。書誌的事例が教える意味を考え、判断しようとする努力がなければ、事例が進化するはずはないからである。執筆第二期に書誌的事例と経験例を見事に組み込んだ随想に成長するはずはないからである。従って「生来の能力の試し」を反知識と性格づけることは、決して執筆第一期の『エッセー』を忘れた勝手な宣言ではない。「判断の試し」の姿勢の継承である。ただ執筆第一期においてはまだ判断が思想の展開にならない未熟さの故に、書誌的事例という知識が表面を覆っていた。しかし執筆第二期にはこの方便への依存を脱する。「生来の能力の試し」の反知識の宣言はその勝関である。「判断が摂取した思想」が『エッセー』の主体になった自信の表明である。

『エッセー』が「生来の能力の試し」として超時間、無責任、反知識の性格のものであるならば、モンテーニュはいつ何をどのように論じようと良いことになる。彼が、「私の頭の中に浮かぶすべてのことを手当たり次第に語り、それを私自身の天賦の能力だけで表現する」¹⁵⁾と言っているのは、この関連を語ったものである。『エッセー』の随想のこのような性格はやはり執筆第

一期に始まる。著作の目的である「判断の試し」がほぼ同じ性格をもつからである。下の言葉にはこの共通性が十分に読み取れるであろう。

判断はあらゆる事柄に適用される道具であり、また、何にでも首を突っ込む。だから私は、ここで判断の試験をするのに、あらゆる機会を利用する。たとえ、それが私にまったくわからない事柄であっても、私はそれに自分の判断を試してみる……時には、空虚な、つまらぬ事柄に対しても、私は、判断が何かそれ自身のために実になるもの、支えとなるものを見いだしはしないかと試してみる。時には、私は、判断を高尚な全く論じつくされた問題の前に連れてゆく……私は問題の採択は偶然に任せる。私には、どれもがみんな結構¹⁶⁾なのだ。

結局「判断の試し」も「生来の能力の試し」も基本姿勢に何ら変わりはない。ただ執筆第一期では「判断の試し」は書誌的事例に強く依存し、判断の行使が思想の展開に発展することはまれであった。モンテーニュの判断はまだ書誌的事例という事実の表面にとどまり、そこに豊富な意味を発掘する力が欠けていた。書誌的事例と言えども現実の複雑な意味の脈絡を含んでいる。もし判断力が十分にそれをあばくならば、経験的に蓄積した自己内部の意味と呼応しつつ、そこから数多くの思索の流れが生まれて来たであろう。ところが執筆第一期ではモンテーニュの判断は書誌的事例の表面の意味にとどまり、事例をつなぐ糸以上になることはできない。「判断の試し」が著作を導こうとしても、『エッセー』は結局書誌的事例に埋まるしかない。一つの章が短いのも同じ理由による。モンテーニュの判断力が探す事実の関連の糸はすぐに切れ、彼はまた別の「試し」の対象を選ばざるをえないのである。それに反して執筆第二期以降の『エッセー』では章は段々と長くなり、随想は紆余曲折を帯びて来る。モンテーニュの判断が看取る意味の脈絡が長く、複雑になったからである。さらに自己描写が『エッセー』の目的に加わると、随想はモンテーニュという小宇宙を表わす諸事実の意味の脈絡と交錯し、その特徴を強める。従って、「頭の中に浮かぶすべてのことを手当たり次第に語り、それを天賦の能力だけで表現する」という「生来の能力の試し」の態度は、基本的には以前の「判断の試し」と変わらないとは言っても、『エッセー』の随想に執筆第一期とは比較にならないほど自由な、錯綜した展開を招来する。書誌的事例の圧迫を脱した判断力が発掘する意味は、事例の世界と経験的な世界が融合し、さらに自己という内面世界が交錯した複雑な脈絡の中にある。過去と未来に束縛されぬ超時間性、すなわち随想の前後の組み立てにこだわらない自由さでそれを追ってゆき、「各部分を生またままの姿」に書き記すならば、まだ論理が規整していない意識レベルの立体的な意味の錯綜が、前後関係の平面にしか置きえない「書かれた随想」を乱すことになる。無責任性、すなわち自己の意識の中に動く思索を忠実に表現する以外の責任を拒否する態度は、第三者には読み取り難い意味の脈絡をそのまま『エッセー』に写すことになる。執筆第一期では「判断の試し」が依拠していた書誌的事例という知識の客観性が一章を統一する働きをもって

いた。しかし反知識を標榜する「生来の能力の試し」はもうこの客観的な関連を離脱している。弁証学や修辞学を唾棄して「生来の能力」のみが導く自然な思索の動きを尊重し、「頭の中に浮かぶすべてのことを手当たり次第に語る」随想は、何を秩序の原理にすれば良いのであろうか。恐らく「試し」を行なっているモンテーニュという人間の自然な秩序、何か人格的な統一性以外にはないであろう。しかしながらそれが『エッセー』に有効であるかどうかは疑問である。人間の自然な思考は第三者の理解を越える飛躍や豊饒な錯綜を宿している。論理的な関連なしに、個々に発現を求める要素を含んでいる。その統一的な秩序を感じることができるのは本人の内的感覚、無意識の世界まで参加した深い内的感覚のみであって、第三者がそれを作者と一体になって感じることは不可能である。

ここにあるのは支離滅裂な断片の寄せ集めである。¹⁷⁾

モンテーニュは読者に向ってはこう言うしかないのである。

『エッセー』が以上のような性格のものであるならば、結局『エッセー』の随想は何を知らせるのであろうか。最後に残るのは「試し」を行なっているモンテーニュという人間以外にはない。

ここにあるものは私のとりとめもない空想である。これによって私は物事を知らせようとしているのではなく、私を知らせようとしているのである……私はここで、考え、判断することだけを目指している。その他のことは私の仕事ではない。¹⁸⁾

「生来の能力の試し」はこうして自己描写が終着点になる。執筆第一期以来の「試し」は自己描写という著作目的を発見して、その純粋性を完成する。「考え、判断する」ことはただ自然な自己を表現するための行為になる。従って『エッセー』の自己描写は「試し」と一体の性格をもつ。ところですべての文芸作品は畢竟作者の自我の表現であり、作者自身を知らせている。哲学者も「考え、判断する」ことによって自己を表現する。『エッセー』の自己描写はどこが違うのであろうか。芸術家が自己表現の行為によって作る作品は、完全に向って歩む彫琢の果てにある。その過程にある下絵、草稿、雛形は作品ではない。一方『エッセー』は不完全な過程を作品に変える。「各部分を生まれたままの姿」で表現する「試し」の軌跡が自己を描く。『エッセー』は、人生の歩みと同じように、永遠に完成しない生成の書である。モンテーニュはその不完全性を生きることによって作品を作り、自己を描く。彼は芸術家でもなく哲学者でもなく、一般の市井の人として『エッセー』を書く。作家であることを拒否して作品の中でも不完全性を生きる時、著作と人生が接近し、書くことが生きる彼を知らせることになる。従って『エッセー』が知らせるのは完成した思想ではなく、思想を練っている思索であると言えよう。発見した真理を証明するために組み立てた思想ではなく、真理を求めて歩む思索が『エッセー』を作るのである。『エッセー』の特徴はモンテーニュが書きながら考え、考えながら思想を形づくってゆく過程であり、その動きや推移の記録が『エッセー』の独創的な自己描写になる。その為普通の思

想書とは異なり、奇妙なことに、『エッセー』の随想は真理を拒否する所から始まる。

だから私はいかなる確実さも保証しない。ただ私がいま考えていること、論じている事柄について私のもっている認識が現在どこまで進んだかを示すだけである。¹⁹⁾

もし自分の思想の「確実さ」に責任を持たねばならぬならば、モンテーニュは「各部分を生まれたままの姿」で示し、自己を描くことができなくなる。客観的に確実な思想とは、自己の自然を越えた構築物でもあるだろう。ところが「試し」つつある判断や思想を記すのでなければ、一方で自己の自然を描くことはできない。モンテーニュの責務は、「いま」の考え、「現在」の認識に注意を注ぎ、自分の中から正確にそれを引き出し、『エッセー』に写すことである。しかしこの「確実さ」は必然的に次の「確実さ」を伴わねばならない。すなわちいま考えていることを正しく展開する「確実さ」である。

どうか私の話す物に期待せず、私がそれをどんな風に話し、どんな意見をもつかに期待していただきたい……もしも私の論述が滞るならば、また、もしも、推論が空虚で、間違っているのに、自らそれに気づかず、あるいはそれを指摘されても気がつくことができないならば、それは私の責任である。²⁰⁾

反知識を標榜する「生来の能力の試し」が「現在」の認識を捉える「確実さ」を身上とするならば、また「生来の能力」の能う限り自分の考えを正しく導き、発展させることに努力を傾けねばならない。自分の考えは展開することによってしか読者に知らせられないのである。まず自分自身が自分の考えをよく知り、ふさわしい姿形を与えてやらねばならない。従ってそこでは表現の苦勞は自己発見の行為でもある。

私はこれを、私の信じていることとして示しているので、人の信ずべきこととして示しているわけではありません。ここでは私は私自身を明らかにすることだけを目指しておりま
²¹⁾す。

こうして、主題にかかわらず、随想することが自己を発見することであり、自己を描き知らせることであるという「試し」のサイクルができあがる。そしてモンテーニュはどの認識についても「人の信ずべき」客観的な真理性を拒否する。自分の思想について真理を放棄することによって執拗に「試し」のサイクルの中を進むのである。しかしながらそれはもっとも真実の認識に近づく道なのではないだろうか。物事について語ることを自己描写と自己発見に一致させることは決して容易なことではない。そのためにはやはり超時間、無責任、反知識という「試し」の純粋性を守らねばならないだろう。もし過去の束縛や未来の憂慮で現在の考えを歪めるならば、もし人の目を気にかけて自分の意見をごまかすならば、もしわずかででも自分の認識を他人の知識で代用するならば、随想が同時に自己描写となり自己発見となることはできない。それ故にこそ純粋な「試し」のサイクルの中で生まれる認識は真実であると言えるだろう。それは客観的な真理の資格に欠ける所があるとしても、世界と自己の間に裂け目がない認識で

ある。それは単なる知識に終る認識ではない。認識が自己と一体になって生まれる人間的な真実である。人間から全く独立した真理が存在するとしても、物事についての認識が同時に自己の発見を招来しないならば、それは人間を疎外する真理であり、人間を導く真実の認識ではないであろう。モンテーニュの「試し」のサイクルに対する執着は彼の真実に対する感覚であつたに違いない。対象と自己の間に夾雑物のない透明な空間、赤裸な自己が対象と向かいあう空間、そのような認識の空間では、対象を前にした自己をみつめ、自己の中に生まれる考えを追求することが同時に対象についての真の認識を獲得する道なのではないだろうか。モンテーニュは「生来の能力の試し」と自己描写を掲げ、一旦真理を放棄することによってこの空間を作り上げ、自分が実感できる真実の認識を探究しているのである。もちろんその為には「生来の能力」に対する強い信頼がなければならない。この点モンテーニュの言う「生来の能力」は、正しく判断し、真偽を弁別するために、すべての人が生まれながらに公平に持っているという「良識」(《bon sens》)の思想の前ぶれである。モンテーニュにとって認識を妨げるものは、「生来の能力の試し」が排除した、浅薄な自我の過去や未来への拘泥とか人間関係とか知識などの人為的な夾雑物なのである。私達は彼の思想の種々な面に、同じような自然への信頼、同じような人為の批判を見ることができよう。

「生来の能力の試し」と自己描写の結合は随想のスタイルにも重要な影響を及ぼす。もともとモンテーニュの思索は物事の論理的構造への関心が乏しく、不一致な、多様な様相を追って展開するところがあった。執筆第一期の書誌的事例を列挙しただけの章でも、しばしば物事の多様性を追求する思索がその構成を導いている。執筆第二期に思索が書誌的事例の圧迫を脱して活発に歩み出すと、彼の個性的な論理である「多様性の論理」によって、『エッセー』の随想は豊かなうねりを帯びて来る。さらにモンテーニュは思索を自己の自然に近づけ、自然な思考の非論理性をも許すようになった。随想の論理的な連鎖や統一的な秩序に拘泥しない奔放な展開が現われて来る。『エッセー』の随想は自由な日常の談論や、時には、論理の枠におさまらない生氣をもつ意識の流れを思わせるようになる。自己描写はこのような発展を助長し、促進したのである。

あなたはここに、私と話しておられたときにごらんになったと同じ態度、同じ調子をおみとめになるでしょう。私は、この中で、たとえ私の不断とは別の態度、何か別のもっと気高い立派な様子をすることができたとしても、そうはしなかったでしょう。と申しますのは、私がこの書き物から望むことは、あなたに私の姿をありのままに思い出していただくこと以外にはないからです。²⁵⁾

こうして超時間、無責任、反知識の随想には、自己描写が要請する新しい条件が加わる。随想は自分の思考の「ありのまま」の動きを表現していなければならない。すでに「試し」の特

性によって相互の論理的な関連や統一性を失い始めていた随想が、自己描写によって追認されるばかりではなく、さらに強調される。なぜなら『エッセー』に書く随想を自分の中に展開する思考の「ありのまま」の姿に一致させようとするならば、随想はどうしても意識の流れの超論理的な躍動を含んで来るからである。今見つめている意識に展開する思考の流れを何の手も加えず自然のままに再現しようとした時、モンテニョはそこで『エッセー』が新しい性格を帯びるのを見たはずである。

けれども、ときにはあまりに行きすぎることもあり、技巧や虚飾を避けるあまり、別の欠点におちいることがあることをも十分に承知している²⁶⁾。

極度に自然さを追求すると、作品である『エッセー』には厄介な問題が生じる。つまり「書かれた随想」と「意識内の随想」との性格の違いに直面する。「意識内の随想」はしばしば、同時にいくつかの随想へ発展する、立体的な、多岐な方向性をもっている。しかし「書かれた随想」はそれらをすべて表現することはできない。論理的な目的意識によって取捨選択を行ない、文章という前後関係の平面的な継起の中に収めなければ混乱を招く。しかも「意識内の随想」は当人以外にはつながりが理解できない、ダイナミックな飛躍をすることがある。「意識内の随想」はそのまま「書かれた随想」へ移すことが困難な、超時間的な豊饒性、客観的な言語記述が掌握し切れない生気をもっている。自己の思考の自然さを追求してゆくならば、「書かれた随想」である『エッセー』はどうしても秩序を欠いてくるのである。「試し」と自己描写を一致させるため可能な限り自己の自然に接近して『エッセー』を書いてみた時、モンテニョはこのような問題に直面したはずである。できるだけ「技巧や虚飾」を排除した時、『エッセー』の随想を乱す、自己という自然の力強い豊饒を覗き見たはずである。彼は『エッセー』において自己描写に努める中で、自己という世界の豊饒と生気を発見してゆくのである。尚自己描写という原理が招く随想の無秩序については、その特徴が顕著になる第三巻の『エッセー』を扱う本論の第三章で考察することにする。

『エッセー』は「判断の試し」から「生来の能力の試し」へ発展し、自己描写に到達した。私達はこの進化を「試し」と自己描写の親近性から考えてみることもできるであろう。まず「判断」とは「あらゆる事柄に適用される道具」であり、その「試し」は、「問題の採択は偶然に任せ」て、「あらゆる機会を利用する」ことができる。「判断の試し」は、対象の無限定性、選択の偶然性によって、経験領域の様々な側面へ広がってゆく中で、広く自己の精神の傾向が現われる行為である。しかも対象は「私にまったくわからない事柄」であろうと、「空虚なつまらぬ事柄」であろうと、「高尚な、論じつくされた問題」であろうと構わない。その世界は意味と無意味が渾沌としている日常の世界に近い。飾らない平素の自己の思索もそこに参加することができる。「判断の試し」は対象の量から見ても質から見ても、非常に広く深く自己の

自然に係る行為なのである。

つぎに「試し」は最初の考えを修整しながら構想するような思索ではない。それは自己の自然にもっとも近い思索である。「試し」はその時その時の自分の意見や判断の可能性を最大限に引き出すことに努力を傾ける。従って、「各部分を生まれたままの²⁷⁾姿」で示し、「産み出したままの姿で……欠陥を塗りかえたり、つくろったりせずに、世間に公表する²⁸⁾」のは自然な成り行きであるとも言えよう。

「試し」は他人との関係から自己を解き放って自由にする。「試し」という気持さは他人に責任がもてない恰好の口実になる。「私は他人に対して、自分の言説に責任をもつことはとてもできそうにない²⁹⁾」と言うことが許される。モンテーニュは自分の「試し」を卒直に報告する以外に、他人に対して「いかなる確実さも保証しない³⁰⁾」で良い。「試し」は自然な自我の発露を抑制しない。

「判断の試し」が「生来の能力の試し」へ発展することによって、「試し」はさらに自己自身に近づく。「生来の能力」についての「試し」であるならば、モンテーニュの理解や判断が「手探りでよるめきながら、つまずきながら、まごまごしながら、やっとのことで進んでいる³¹⁾」姿も『エッセー』に現われて良いことになる。彼の自然な思索が作品の中に市民権を得る。

「生来の能力」と限定することによって、修辞法などの表現の技術や知識を拒否し、自己の自然を舞台に登場させる。反学識、反記憶の立場を標榜することによって、たとえ最初は読書の影響をうけたとしても、彼のもとに残った「判断が摂取した思想³²⁾」のみが存在価値をもつ。こうして「判断の試し」から「生来の能力の試し」へ発展するなかでモンテーニュという精神の「自然」が作品の主役になってゆく。「試し」自体の進化がモンテーニュという人間の「自然」を描く自己描写のごく近くに達するのである。「試し」というものはある意味では多分に自己を描く「試し」に行き着く性格をもっていると言えよう。と言ってももちろんそれは必然的な結果ではない。「試し」を自己描写の方向へ促す力がなければならない。その力は、以前に説明した自己描写の感情的な原因と認識的な原因の中にある。無位無官の無聊の日々を送る中で稀薄になってゆく存在感に苦しむモンテーニュの心は、思想を媒介にする自己表現に飽き足りず、自己の存在と作品の一層直接的な関係を欲していた。一方で彼は書誌的事例から経験例へと「事実」を開拓する努力の中で、自己自身という「事実」の層へ進んでいった。これらの感情的な理由と認識的な理由に促されて、「試し」は自己を判断の対象に加え、そして自己描写と一体になってゆくのである。

モンテーニュは最初、『エッセー』は「判断の試し」であると意味づけた。一方自己描写は、官職を放てきしながらまだ新しい存在様式を確立し得ないモンテーニュの心が求めた自己表現の形式であり、その志向のもとに彼は書誌的事例から経験例へ、そして自己自身という新しい

「事実」の領域へ向って行った。つまり自己描写は最初から「判断の試し」と一致した著作の目的だったのではない。一方では「私は、ここで判断の試験をするのに、あらゆる機会を利用する³³⁾」と言いながら、「実習について」(Ⅱ—Ⅵ)の章における精緻な自己観察は、「死に馴れるためには、死に近づくしかない」という「教訓をくみ取らなかったとしたら、まったく空虚なもの」なのである。自己はどんな事柄でも良いはずである「判断の試し」の対象にはまだ含まれていなかった。「実習について」の章における自己自身という「事実」の層の発見は、「教訓」のような別の価値で意味づけられていた。しかしながら確かに自己描写はモンテーニュの思索に寄与したと思われる。自己を描きながらの思索は、日常的な経験の世界へ思索を導き、読書への依存を脱し、自分自身に即して思想を形成させた。あるいは、古人の思想を語る一方で自己を描くことは、言葉の堆積にすぎない書物の思想と自分の人生の間に呼応する関連を呼び覚ますであろう。それは古人の思想を摂取する効果的な方法だったに違いない。あるいは「自」と「他」の対峙の構造に立つ自己描写は、自己を語ることが同時に同じ視点で他人を観察することであり、他人を批判することが同時に自分を反省することであるという、自己と他者の世界を往来する観察と批判のリズムを作った³⁴⁾。自己描写によって、外の世界に対する認識行為は同時に自我を確立する認識行為になり、自己の世界を発見する行為になった。こうして執筆第二期における進化の中で、自己という世界が外の世界と変わらない同じ「判断の試し」の対象として現われて来るのである。

しかし、私がどんなふうに私を知らせているにしても、ありのままの自分を知らせているなら、私は目的を達したのだ。だからこんな愚かな、つまらぬ事柄をあえて筆にすることをも弁解はしない。卑小な私自身を主題にすればこれ以上充実した、確かな事柄には耐えられないのだから……ともかく、他人から注意されるまでもなく、私はこれらがすべていかにつまらぬものであるかを、また、私の企てがいかに向こう見ずで大胆なものであるかを、よく知っている。私は、私の判断が混乱しなければそれで十分なのだ。これらはそれの試みなのだ³⁵⁾。

自己を観察して描くのはもはや何か有益な教訓を引き出すためではない。どんなに「愚かな、つまらぬ事柄」であろうと、「ありのままの自分を知らせているなら」、それはモンテーニュの「判断が混乱し」なかった証拠である。彼は立派に『エッセー』を書く目的、「判断の試し」という目的を果たしたのである。自己自身が「判断の試し」の主題になった今では、「判断の試し」と自己描写の二つの著作の目的は表裏一体である。『エッセー』は確かな存在感を求めるモンテーニュの自我の欲求を吸収し、彼の著作行為は感情的な安定性を増す。『エッセー』を書く行為は彼の現実の存在に重なった、新しい存在様式になる。空虚なものでも些細なものでも、どんな問題でも良いような「判断の試し」にはどうしても知的な遊びの空しさがあった。それは自己の存在に深くかかわった行為ではない。モンテーニュは本を書く職業を選んだのではない。

彼が『エッセー』を書き始めたのは、退官生活の無聊の中で「茫漠たる想像の野原にだらしなく迷」う自分、「どこにでもいる」がまた「どこにもいない」ような自分に「確固たる目的」を与えるためであった。³⁷⁾しかし対象に何の中心もない「判断の試し」は「どこにでもいる」がまた「どこにもいない」ような稀薄な存在性を脱していない。まだ同じような存在の不確定性、曖昧性の中にある。従って執筆第二期に「判断の試し」が自己描写と一体になった時、モンテューニは『エッセー』の著作に大きな安定感を覚えたに違いない。まだ第三者に対して自己描写を意味づけることができないにもかかわらず、彼が自己描写に執着するのも無理はない。「判断の試し」と自己描写を一致させた作品によって、彼は執筆以来望んでいた「確固たる目的」、すなわち確かな存在感を得ることができたのである。『エッセー』を書くことは彼の思索研鑽の行為であると同時に、自己の全人格を表現し、全存在を再構成する行為になる。『エッセー』は自己の存在の中に根をおろす。『エッセー』を書くことが今や自己の存在を生きることなのである。

モンテューニは、「私の性状と能力とを、私の死後数年でも、あるいは数日でも、永もちのするような堅固なものの中に（変質も変化もこうむらせずに）おさめておく」³⁸⁾ために『エッセー』を書く。『エッセー』の著作は自己を発見し、発見した自己を作品の中に固定する行為になる。しかしながら実はその自己そのものが不動の根を張った存在ではないのである。それは世界の有為転変、万物の生成の運命を共有し、明日にも別の物に変わるかも知れない存在である。

ここでは私は私自身を明らかにすることだけを目指しております。その私なるものは、
もしも何か新しいことを習得すれば明日はおそらく別のものになるでしょう。³⁹⁾
従って自己描写は自己の本質に根差しているかどうかかわからない。モンテューニはただ生成する自己の一貌一貌を描くだけである。彼の描写はそれしか保証できない。

だから私はいかなる確実さも保証しない。ただ私が考えていること、そして、今私が物
事についてもっている認識がどこまで進んでいるかを示すだけである。⁴⁰⁾
このような自己描写は何度その筆を重ねても自己の移り変わりを描くにすぎない。実際モンテューニが目指す自己描写もそのような性格のものである。

私は自分の考えの推移を示したいのだ。⁴¹⁾

しかし移り変わってゆくものがはたして自己の真実なのだろうか。常に変化しているものは真理とは言えないであろう。自己描写は何ら真実を捉えていないのではないだろうか。たしかに「推移」する一貌一貌を『エッセー』に記録すれば、不確かな自己の存在を作品の中につなぎ止めることができよう。変化を把握することは自己が変化の中に消え去ることを妨ぐ行為でもある。しかしながら自己描写がモンテューニという一人の人間の真実さえ表現していないならば、それが人間の真実を表現していることもまたあり得ない。自己描写はモンテューニ本人にとってしか価値がない。精々彼の「考えの変化の推移を見分けることができれば面白い」と思⁴²⁾う者、彼とごく親しい人達に対してしか意味をもたない。すでに述べた如く自己描写はモンテ

ーニュの思想の成熟に重要な貢献をなした。しかしモンテーニュは自己描写に「書斎の片隅の自画像⁴³⁾」以上の存在理由を与えることができない。「判断の試し」がすなわち自己描写である現在、それは『エッセー』にそれだけの価値しか付与できないことを意味する。まさに序文にあるように『エッセー』は「わが家だけの、私的なものでしかない」と言わざるを得ない。『エッセー』は、身内の者や友人たちが彼と「死別した後に……この書物の中に」彼の「性格や気質の特徴を幾らかでも見いだす」ための便宜以上の価値を主張することはできない。しかしながら一方このような限定は、『エッセー』の「珍しさと新しさ」の頑固な擁護でもある。「判断の試し」が同時に自己描写である著作は、モンテーニュを「駆り立てる新奇な、風変わりな気分⁴⁵⁾」であった。彼は自分の心にもっとも適った新しい作品形態を直観したのであろう。彼は理由はともかく「それを自由に走らせてやらねばならない⁴⁶⁾」と思う。彼はそこに第三者にも意味のある新しい作品形態を予感したかも知れない。彼がこの「乱暴な、とっぴな企て⁴⁷⁾」を続ける決心は固い。『エッセー』を「わが家だけの、私的なもの」、「身内や友人たちだけの便宜のため」と限る裏には、『エッセー』の独創性を固持しようとするモンテーニュの強い意志が隠れている。このような限定によって『エッセー』の独創性は、他人が容喙する余地のない領分で固守されるのである。

奥方様、珍しさと新しさとは常に物事に価値を与えるものでありますが、この二つの助けがなければ、私はこの愚かな企てを私の体面を汚さずに、片づけることはできません。しかしこの企てはあまりにもとりとめがなく、普通のしきたりとあまりにも違った顔をしておりますので、そのためにかえって、お許し願えるかも知れません……これは乱暴な、とっぴな企てなのです。ですからこの仕事の中には、その珍奇さ以外に注目に値するものは何もありません⁴⁸⁾。

「判断の試し」が超時間、無責任、反知識を標榜し、自己描写が他人との関係を拒否する時、ここに自己充足的な世界が完成する。モンテーニュは『エッセー』の著作の中でこのような世界を築きあげたのである。それはある意味では確かに堅固な世界である。すべてが自己に収斂する世界である。しかしそれは『エッセー』の終着点であってはならない。認識がそのような空間に閉塞して良いわけではない。『エッセー』の自己描写は、モンテーニュの認識は、自己の存在に収斂しつつ、かつ自己を越えなければならない。自己描写が「判断の試し」になるから、「判断の試し」が自己を対象にしているからと言った循環を抜けて、『エッセー』が価値を獲得する必要がある。自己自身を対象にして判断を試みるのが同時に人間認識の試みであり、自己を描くことが同時に人間の性状や本質を研究することにならねばならない。その時『エッセー』という作品は揺るぎない根を張り、最終的な安定性を得るはずである。『エッセー』を書くことが自己の存在を普遍的な人間性の中に確立する行為になるはずである。執筆第二期までのところモンテーニュはまだそのような使命を明瞭に自覚しているようには思われない。しかしながら

私達は次のような所にその兆を見ることができる。

①古代の人々が人間についてもったあらゆる意見のうちで、私が好んで抱き、もっとも愛着する意見は、われわれ人間をもっとも軽蔑し、こきおろし、価値のないものとするそれである。哲学はわれわれの自負と虚栄心を攻撃するときほど、また、卒直に自分の未解決と、無力と、無知を認めるときほど、有利なことはけっしてないと私は思う。公の場合にも、他人の場合にも、われわれが持つもっとも誤った意見を産みだす母親は、われわれがわれわれ自身についてもつまりによすぎる意見であるように思われる。②水星の周転円の上にまたがる人々は私の神経にさわる。実際、私の研究は人間を問題にするのだが、その研究の中に、あまりにも多種多様な判断や、幾重にも重なった困難の深い迷路のあること、哲学の学校においてさえあれほどの相異と不確実のあることを知るとき、あなた方はおわかりになると思うが、(なぜなら、これらの人々は、彼ら自身に関する知識についても、また絶えず彼らの目の前にあり、彼らの内にある自己の性状に関する知識についても、決定することができなかったのだから。また、彼ら自身が動かしているものがどうして動くのかも知らないし、彼ら自身が操作している発条をわれわれに解明することもできないのだから) どうして私が、第八天体の運動やナイル河の満干の原因についての彼らの説明を信じられようか。聖書にも、知識欲は人間を苦しめるために神から与えられた重荷である、とある。

③けれども私個人に話を戻すと、誰でも私以上に自己を小さく見ることはきわめてむずかしいと思う。いや、誰でも私以上に私を小さく見ることはきわめてむずかしいと思う…
⁴⁹⁾
 … (番号は筆者)

②の最初でモンテーニュは今までとは違った次元で『エッセー』を意味づけて、「私の研究は人間を問題にする」と言っている。彼自身の『エッセー』観全体に影響を及ぼすはずの重要な意識である。しかし『エッセー』の中で『エッセー』を語ることの好きな彼が人間研究の抱負を披瀝している随想はほかに見当たらない。執筆第二期までのところ自己描写はそのような次元から意味づけられてはいない。上記の引用は③からもわかるように自己描写から生まれた脱線部である。「私の研究は人間を問題にする」という挿入句は、自己描写から①を経て②へ展開する中でふと意識に浮上した言葉であると思われる。実際文章で表現することには必ずそのような現象が伴うはずである。それ故に書くことが私達の内部に蓄積されたものを明瞭に意識化する大切な行為になる。私達は上記の展開から、自己描写と人間研究はモンテーニュの意識の深部ではすでに触れあっていると想像して良いであろう。人間研究の抱負は行き摺に現われた意識であり、執筆第二期にはまだ『エッセー』観の中に取り込まれていない。しかしながらそれは新しい進化の兆である。モンテーニュが「珍しさと新しさ」や「新奇な、風変わりな気分」を強調し、「乱暴な、とっぴな企て」に執着する感情は、自己の作品の可能性についての予感に動

かされていたかも知れない。また、自己を「判断の試し」の主題とし、『エッセー』を自己描写の書とすることは、必ずしも自己の狭い世界に踟躕することではない。書誌的事例を対象にして始まった「判断の試し」は、経験的な事実から自己自身という事実へ向った。「判断の試し」の進化の結果、外的世界と内的世界がひとしく認識の対象になり、そして自己という小宇宙が焦点を占める認識の世界ができあがった。それはまさしく自己へ集束してゆく歩みであった。しかしながらそれは自己の世界に閉じ籠る退歩ではない。その集束は正当で、有益な進化である。真の思想的な認識は一度自己への収斂を経なければならないであろう。それは自己認識を人間認識の中核にする発展の道に達したことを意味する。自己認識を中核にした人間認識によって真の世界認識が行なわれる構図が生まれたのである。そこで自己認識は翻って世界認識に飛躍するであろう。「判断の試し」と自己描写を一致させ、他人に対しては「珍しさと新しさ」以外のすべての価値を放棄して、自己の世界に極限した『エッセー』がそこで再び他者の世界に蘇るであろう。「人間を苦しめるために神から与えられた重荷」にすぎないような知識を拒否した反知識の書である『エッセー』が、人間と世界についての智慧の書になるであろう。

——第二章終り——

註

- 1) I—XXVI, p. 187 ; p. 106. 前者は以前紹介した1580年版『エッセー』のページ数、後者は邦訳を拝借している原二郎氏訳『エッセー』(筑摩書房世界文学体系)のページ数を表わす。但し訳文はこの論文の方法に従い、1580年版に合わせて修正している。以下同様。
- 2) II—XVII, p. 435 ; p. 29. 但しこの引用部は晩年追加された語句を含んでいる。内容に変化はないので、引用して理解し易い方を選んだ。
- 3) II—XXXVII, p. 595 ; p. 114.
- 4) II—XXXVII, p. 595 ; p. 114.
- 5) I—XXVI, p. 190 ; p. 107.
- 6) II—X, p. 95—p. 96 ; p. 293.
- 7) II—X, p. 96 ; p. 293.
- 8) II—X, p. 95—p. 96 ; p. 293.
- 9) II—X, p. 108 ; p. 298.
- 10) II—X, p. 96 ; p. 293.
- 11) II—XVII, p. 452—p. 453 ; p. 40.
- 12) I—XIV, p. 67 ; p. 40.
- 13) たとえば拙稿(その三) 故事実例の拾集(天理大学学報第90輯)、(その五) 事実の吟味と真理の探究(天理大学学報第94輯)を参照。
- 14) cf. II—XVI, p. 416—p. 419 ; p. 17—p. 19.
- 15) I—XXVI, p. 187 ; p. 106.
- 16) I—L, p. 459—p. 460 ; p. 217.
- 17) II—XI, p. 140. この部分はボルドー市版では消去されている。従って邦訳の『エッセー』には書かれていない。
- 18) II—X, p. 96 ; p. 293.

- 19) II—X, p. 96 ; p. 293.
- 20) II—X, p. 96—p. 97 ; p. 293—p. 294.
- 21) I—XXVI, p. 190 ; p. 107.
- 22) 拙稿（その三）故事実例の拾集（天理大学学報第90輯）参照。
- 23) 拙稿（その十）多様性の論理（追手門学院大学文学部紀要第10号）参照。
- 24) 拙稿（その八）表現法の個性（追手門学院大学創立十周年記念論集文学部篇）参照。
- 25) II—XXXVII, p. 643 ; p. 133.
- 26) II—XVII, p. 438 ; p. 30.
- 27) II—XXXVII, p. 595 ; p. 114.
- 28) I—XXVI, p. 188 ; p. 106.
- 29), 30) いずれも, II—X, p. 96 ; p. 293.
- 31) I—XXVI, p. 187 ; p. 106.
- 32) II—XVII, p. 453 ; p. 40.
- 33) I—L, p. 459—p. 460 ; p. 217.
- 34) 以上に素描したことについては、拙稿（その十一）自己描写（追手門学院大学文学部紀要第11号）参照。
- 35) II—XVII, p. 456 ; p. 41.
- 36) I—L の冒頭を参照。
- 37) I—VIII 参照。
- 38) II—XXXVII, p. 643 ; p. 133.
- 39) I—XXVI, p. 190 ; p. 107.
- 40) II—X, p. 96 ; p. 293.
- 41) II—XXXVII, p. 595 ; p. 114.
- 42) II—XXXVII, p. 595 ; p. 114.
- 43) II—XVIII の冒頭を参照。
- 44) II—VIII, p. 66 ; p. 275.
- 45) II—XVII, p. 456 ; p. 41.
- 46) II—XVII, p. 456 ; p. 41.
- 47) II—VIII, p. 67 ; p. 276.
- 48) II—VIII, p. 66—p. 67 ; p. 275—p. 276.
- 49) II—XVII, p. 433—p. 434 ; p. 27.